

221

雁かりきく聞きやいあらせき井さむらいしゅうの関の侍衆

「晩秋、宿直の侍衆が、月夜のうす明りに雁の列を見た。声をかけあいながら渡って行く姿を、いつまでも見送っていた」というのです。厳しい取り調べが行われる昼間の勤めも終わり、気をゆるすというわけではありませんが、季節の移ろいを覚えたひとときだったに違いありません。新居の関所の番頭は五味家の出、配下にも風雅を解する者が多かったのでしょうか。



季語 雁（秋）
場所 湖西市新居町内山
みそがや
三十ヶ谷の森
建立 平成4年

蕪ぶそん村

与謝 蕪村 (1716 - 1783) 摂津国（大阪市）の生まれ。日本文人画の確立者。客観的態度で絵画的な印象鮮明な句を詠んだ。蕉風への復古を唱え、天明俳諧の中心となった。

223

雁かりきくの来てほそえ細江あきの秋をきだめけり

706

ひく馬ま大野まおのにす澄みつのぼる月つき

庭園の池畔ちはんに建つ3基の一つ、県西部唯一の連句碑です。

発句の「細江湖に雁が飛来し、すつかり秋らしくなった」を受けて、脇に「月明かりの中を飛来する曳馬野上空の雁列」を配した、式目に適った優雅で美しい一幅の絵になっています。和歌の教養を身につけていた細江俳壇はいだんの人ならではの碑といえましょう。



季語 雁・月（秋）
場所 北区細江町気賀
正明寺
建立 明治35年

成せい佳か旦たん雪せつ

*松井 旦雪 (1833 - 1903) 北区細江町気賀の人。本名・宗之。通称・強八郎。号・清音居。*名倉 成佳 (1840 - 1916) 北区細江町五味の人。本名・六治。号・柳園。*共に西遠吟社中。

あ行

か行

さ行

た行

な行

は行

ま行

や行

ら行

わ行

230

かはほりも出よ浮世は花に鳥

ばせを

「かはほり」とは蝙蝠こうもりのことです。夜行性で鳥か獣か判別がつきません。ここでは「蝙蝠も鳥のうち」という俗説ぞくせつにしたがっています。「世間では花が咲き、鳥たちがさええずっている。蝙蝠よ、引き籠こもつてばかりいないで、出て来て仲間に加われよ」と、住職の高橋月查を蝙蝠に例え、この句を用いて誘い出そうとしたのです。呼びかけているのは、俳友であり碑の建立者でもあった大瀬の榎木夷白いぱくです。



季語 花（春）
場所 浜北区根堅
岩水寺
建立 明治元年

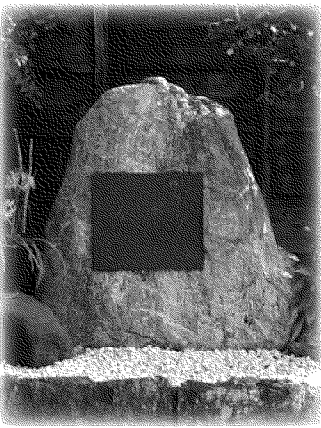
松尾 芭蕉 (1644 - 1694) 伊賀上野の生まれ。本名・宗房。別号・桃青。蕉風俳諧を確立。俳聖と尊称される。東海道を往来したが、浜松市、湖西市で詠んだ句はない。

231

かはるぐ覗く童や夏座敷

句仏

開放的な田舎の子どもたち。大切なお客さんがいらしているからという注意も、かえって興味を誘ってしまいます。そんな子供たちが大人の目を盗んで覗きに來るのです。句仏もまた、無邪むじや気さを楽しんでいます。昭和4年の初夏、岡本の夏目家を訪れたときの吟。失意の底にあつた句仏に、夏目家のもてなしはうれしかったに違いありません。今は夏目家分家の門前にあります。



季語 夏座敷（夏）
場所 北区三ヶ日町岡本
夏目邸
建立 昭和6年

大谷 句仏 (1875 - 1943) 京都の生まれ。本名・光演。真宗大谷派第三二世管長。『懸葵』主宰。真宗思想を根底に置く典雅にして高潔な句風に特色がある。

234

がんにじつ
元日やことしも来るぞ大晦日
おおみそか

にのみやそんとくおう
二宮尊徳翁

私たちの郷土は幕末以来、報徳ほうとくが盛んでした。俳諧は読み書きの学習に役立つ、報徳は人としての生き方を学ぶのに役立つと、俳諧と報徳を啓発の具としようとした農村指導者が大勢いました。この碑の建立は、そうした時代背景を如実にょじつに現しています。

「お正月だと浮かれていると、すぐ大晦日おおみそかが来るよ。気持ちを引き締め、時間を惜しんで働きなさい」というのです。



季語 元日（新年）
場所 東区豊西町
十湖百句塚
建立 明治 39 年

二宮 尊徳（1787 - 1856）相模国（神奈川県）の生まれ。通称・金次郎。質素儉約を旨とした。報徳仕法の開祖。幕末に各地の農村復興、財政再建にあたり成功させた。

244

かんりゅう
寒流として天竜も伏し流る
てんりゅう
ふなが

うこう
羽公

「眼下に白い川原が広がり、冬枯れた天竜が青々と、ひっそりと、緩やかに流れてゆく」というのです。季節による水量の多少こそあれ、悠久ゆうきゆうの天竜川の姿が、その精神性を含めて的確にとらえられています。

羽公は、風土に根ざした芯しんの通った叙情句じょじょうくが特色といわれますが、この句など地方の人に徹した俳人・羽公の真骨頂しんこつちようといえるでしょう。



季語 寒流（冬）
場所 天竜区二俣町二俣
鳥羽山公園
建立 昭和 57 年

百合山 羽公（1904 - 1991）中区伝馬町の人。浜松商業高校卒業。最初『ホトトギス』に投句。のち、秋桜子しゅうおうし主宰の『馬酔木』あしび同人。相生垣瓜人うなぎかと『海坂』を主宰。昭和 49 年第八回蛇笏だこつ賞受賞。

あ行

か行

さ行

た行

な行

は行

ま行

や行

ら行

わ行

249

きじ啼くや己がすむ野に餘る聲

山静

山静とは山崎宗十郎、明治19年4月8日、気賀の役場が倒壊した折、書類の搬出のため退避が遅れ殉職した官吏でした。哀悼・顕彰碑です。当時の郡長、十湖の揮毫です。「きじが啼いているよ。己が棲む野を越えて遠くまで響く声で」というのです。碑は昭和49年の七夕豪雨の土砂崩れで埋没、久しく忘れられていましたが、54年再発見され、現在位置に移されました。



季語 きじ(春)
場所 北区細江町気賀
長楽寺
建立 明治19年

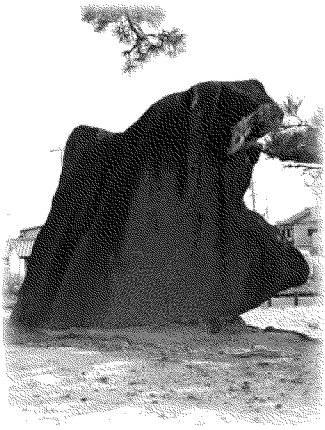
山崎 山静 (1840 - 1886) 本名・宗十郎。十湖が引佐^{あらたま}麓玉郡長当時、気賀村戸長役場吏員。役場倒壊事故で殉職。嵐牛門。西遠吟社社中。

252

木戸しまる音やあら井の夕千鳥

太祇

「暮六つ(午後6時)、関所の木戸は鈍い音を軋^{さし}ませて閉まり、通行はびたりと途絶えてしまった。あとは波の音と千鳥の声が聞こえるばかりである」というのです。新居の関所は箱根と並ぶ江戸防備の要衝^{しょう}で、「入鉄砲と出女」といわれる吟味^{ぎんみ}の厳しさで知られました。暮六つを境とした関所の雰囲気、緊張と弛緩^{しかん}、喧騒^{けんそう}と静寂が対照的に見事に捉えられています。



季語 夕千鳥(秋)
場所 湖西市新居町新居
新居関所
建立 昭和36年

炭 太祇 (1709 - 1771) 江戸の人。別号・不夜庵。当初江戸で活動し、上洛後は京都鳥原に住み、鳥原俳壇を指導。与謝蕪村らとともに中興期の俳壇で活躍。

253

きのふけふあしたへ桜々かなさくらさくら

経郷けいきょう

境内に3基、師・百合山羽公、主宰者・井村経郷、社中一同の碑の3基を建立し、本堂の俳額奉納と併せて、「水鳥の会」の記念事業は完成しました。桜は盛りや散り際を称たたえる例が多いのですが、この句のリズムからは未来あしたに向かう意志、連綿れんめんとして尽きることのない生命力が伝わってきます。結社の発展にかける強い意志が込められているようです。



季語 桜(春)
場所 北区三ヶ日町大崎
宝珠寺
建立 平成21年

井村 経郷 (1941 -) 三ヶ日町都筑の人。百合山羽公に師事。『水鳥』創刊・主宰。三ヶ日俳句会主宰。

275

草臥て宿かるころや藤の花ふじはな

芭蕉翁ばしやうおう

「二日の旅に疲れて旅籠はたごを求め黄昏たそがれ。晩春の暮色ぼしよくの中に淡い紫の藤の花がおぼつかなく咲き垂れて、そこはかとな旅愁りよしゆうと春愁しゆんしゆうを誘うことだ」というのです。今日たまたま道端にこの碑を見つけると、芭蕉がここで詠んだのかと思ってしまう。実は大和行脚やまとあんぎやの途中「椎谷観音しいや」を訪ねた時の句です。東海道を通ったこともある芭蕉ですが、浜松での作はないのです。



季語 藤の花(春)
場所 東区下石田町
庚申堂
建立 天保15(1844)年

松尾 芭蕉 (1644 - 1694) 伊賀上野の生まれ。本名・宗房。別号・桃青。蕉風俳諧を確立。俳聖と尊称される。東海道を往来したが、浜松市、湖西市で詠んだ句はない。

あ行

か行

さ行

た行

な行

は行

ま行

や行

ら行

わ行

284

くもはれ
雲霽てことぐく皆白雪ぞ
みなしらゆきらいほ
来圃

江戸時代末期の明和のころ、日照りに苦しんだ薬師村は、隣村と激しい水争いをしました。その首謀者として捕えられ、明和8（1772）年に江戸送り・打ち首になつた庄屋、小枝桑次郎を悼んでの句です。お上を畏れ、公然と供養できない中で、同族の来圃は精一杯の気持ちを含め、汚名を雪ぐべく句に託して「雪冤^{せつえん}無実を明らか^{そそ}にすること」を訴えたのです。



季語 白雪（冬）
場所 東区薬師町
公会堂
建立 天保5（1834）年ころ

小枝 来圃（不詳－1834）東区薬師町の人。雪中庵系の「浜松兄弟庵連」の指導者。

294

たき
くれたれば瀧ばかりなり那智の空
なち そらしゅんこおう
春湖翁

初めて訪れた那智の瀧は「直立のいたゞきにかゝり、空翠にそゞぐ。その響は、麓の里にきこえ、遠くは沖行船よりも望つべし。近より見るに、風おこり雲むして、おのづから枯腸もあらはるゝ心地せられたり」（雲鳥日記）とあります。原生林に覆われた落差133メートルの御神体。日没後の聴覚だけで捉えた瀑布の圧倒的な存在感を見事に表現しています。



季語 瀧（夏）
場所 東区豊西町
十湖百句塚
建立 明治39年

橘田 春湖（1815－1886）甲斐（山梨県）の人。別号・小築庵。松永蝸堂、松島十湖の師。幕末・維新の俳諧第一人者で、明治6年教部省より俳諧教導職に任ぜられた。

297

原人の歯牙凍蝶となりけり

原人 羽公

凍蝶とは、冬に見かける凍ったように動かない蝶をいいます。訪れる人のまれな三ヶ日人遺跡で凍蝶を見つけたのでしよう。それが三ヶ日人の歯の化石のように思われたというのです。気が遠くなるような停止した時間がそこにあります。この種のもとしては珍しい石灰岩を用いた碑も、風雨にうたれ、やがては自然に返っていくのであろうと思われました。



季語 凍蝶（冬）
場所 北区三ヶ日町只木
発掘遺跡
建立 平成5年

百合山 羽公 (1904 - 1991) 中区伝馬町の人。浜松商業高校卒業。最初『ホトギス』に投句。のち、秋桜子主宰の『馬酔木』同人。相生垣瓜人と『海坂』を主宰。昭和49年第八回蛇笏賞受賞。

309

ここといふ落付得たし花の中

高井 春鳳

「人は誰でも、ここだという、最後の落着き先を得たいものだ。例えば咲き誇る桜の下など」というのです。西行の歌を連想させます。

同句は明治39年、十湖百句塚にも建てられました。自邸には既に十湖と自身の句碑、頌徳碑があり、平成20年に更なる碑が追加されました。3代にわたり俳諧と報徳に生きてきた家の歴史・在り様が現れています。



季語 花（春）
場所 東区笠井新田町
高井邸
建立 昭和8年

高井 春鳳 (1847 - 1925) 東区笠井新田町の人。本名・善蔵。別号・藤廼家、好文居。十湖の門人第一号と伝えられる。嗣子・春雄、孫・三菁と三代にわたる十湖門の重鎮。

あ

か

さ

た

な

は

ま

や

ら

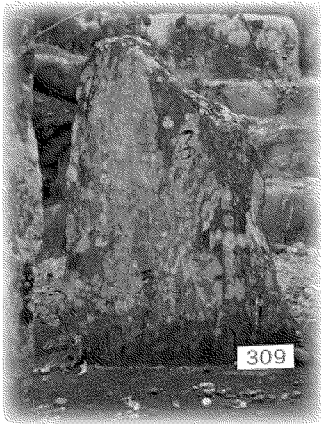
わ

315

子そだての心に成りて蚕かな

誠養園江山

養蚕ようさんは以前はどの地方でも盛んに行われていました。養蚕農家では「お蚕さま」と呼んでそれはそれは大切に扱ったものでした。多くの手間と細心の神経をつかう日々の飼育と作業は、愛情をかけて大切な我が子を育てるに等しいものがありました。句意は単純明快です。子育てをするのと同じ心、たつぷり愛情をかけて蚕を育てることだということです。



季語 蚕（春）
場所 東区豊西町
御嶽神社
建立 明治 29 年

伊藤 江山 (1862 - 1939) 東区子安町の人。本名・豊太郎。別号・白童子、雲梯庵。書をよくし豊川稲荷、善光寺などに写経を奉納。書家としては蒲邨と号す。

317

子にあくと申す人には花もなし

芭蕉翁

句意は「子育てに飽きたなどと言っているようでは、風雅ふうがのほども察しがつく。せめて花をゆつくり味わう心の余裕はもちたものだ」というのです。

松島十湖の高弟として七十二峰庵を号し、俳諧ほうかいと報徳ほうとくに生きた大木おおい随處ずいじょはこの句に盛り込まれた思想に共感して、自邸の庭に碑を建てました。大木家では百年を経た今でも、この碑を大切にしています。



季語 花（春）
場所 東区笠井新田町
大木邸
建立 明治 39 年ころ

松尾 芭蕉 (1644 - 1694) 伊賀上野の生まれ。本名・宗房。別号・桃青。蕉風俳諧を確立。俳聖と尊称される。東海道を往来したが、浜松市、湖西市で詠んだ句はない。

325

衣更幼な心にかへりけり

ころもがえおさ ごころ

青布の七回忌追善のために建てられました。職業は染色業、俳号もそれにちなんだものであり、句そのものも織布に関わる内容になっています。

「衣更の時期になった。真新しい夏の着物に袖を通すと、子供の頃に返ったかのように、心がわくわくしてくることだ」というのです。自身の衣更でもあり、孫たちの衣更のはしやぎようを見た気持ちでもあるのでしょうか。



季語 衣更(夏)
場所 東区大瀬町
東漸寺
建立 昭和5年

石岡 青布 (1868 - 1924) 東区大瀬町の人。本名・艶吉。号・青布は家業の染色業に因むもの。

せいふ
青布

326

衣手を押へ灌仏し給へり

ころもで おさ かんぶつ たま

句意は「近郷の臨済宗方広寺派大本山方広寺は歳時記に載る法会すべて行う。80歳をとうに越した老管長が衣手を押えて灌仏をされていた」(自句自解) というのです。灌仏というのは、釈尊誕生の4月8日、誕生仏の像に甘茶を注いで供養する行事で、昔の子供たちには、楽しみを催しました。この碑は、本堂への迂回路の坂道に建っています。



季語 灌仏(夏)
場所 北区引佐町奥山
方広寺
建立 平成15年

仁尾 正文 (1926 - 2015) 徳島県の人。浜松市在住。富安風生『若葉』の小誌として出発した『白魚火』を主宰。俳人協会静岡県支部長。

まさふみ
正文

あ行

か行

さ行

た行

な行

は行

ま行

や行

ら行

わ行

327

昏鐘や一打一打に散る銀杏

「秋の一日方広寺で過ごさせていただいた。その昏鐘の一打ごと銀杏が美しくどつと散った」というのです。

碑は鐘樓の傍らに、本堂と向かい合つて建っています。この句は、平成18年10月の「観月の夕べ」で披露されたものです。「俳句は慰めであり、励まします。そして又自然や生活を客観的に詠うことは楽しみです。自然を見ていると心が安らぎます」（有馬氏）



季語 銀杏（秋）
場所 北区引佐町奥山
方広寺
建立 平成19年

有馬 朗人（1930 - ）大阪の生まれ。旧制浜松一中に在籍、途中転校。物理学者。もと東大総長。平成2年『天為』を創刊・主宰。

朗人 あきと

328

咲てちる花をうき世のかみかな

鴨江旅館街は、その昔遊郭があつたところで、今でも佇まいのどこかに当時の面影をかすかに残しています。この句は、そこで生きる女性の哀しき憐れさを、桜花の命の儂さに重ね合わせて吟じたものです。

碑は秋葉神社の社頭から、戦時中に太平洋を望む崖頭に移設。歴史の証人のように、ひっそりと建っています。碑面は十湖の揮毫。浜松俳壇などによる建立です。



季語 花（春）
場所 中区鴨江一丁目
鴨江旅館街奥
建立 大正13年

榎木 兄山（1852 - 1930）東区大瀬町のち鴨江の人。本名・輝治（照治）。

兄山 けいざん

あ行

か行

さ行

た行

な行

は行

ま行

や行

ら行

わ行



季語 囀 (春)
 場所 北区三ヶ日町大崎
 宝珠寺
 建立 平成 21 年

「言葉を用いて、その時その時の心を形象化し、作品を詠みつつ自身を育む」ことを目指す俳誌『水鳥』社中の集合碑です。師・百合山羽公、主宰者・井村経郷の独立碑に続くもので、138名の句を刻しています。ここでは主宰者の句を紹介しました。珍しい形状ですが、同町では、先行するものとして、寛政10（1799）年建立の都筑大野家の経塚、文化10（1814）年建立の宇志「竹茂の墓」があります。

井村 経郷（1941 - ）三ヶ日町都筑の人。百合山羽公に師事。『水鳥』創刊・主宰。三ヶ日俳句会主宰。

332

囀さえずりに妻つまのいちいちにち始はじまりぬ

経郷けいきょう

337

咲さきながらのび進すすむなり藤ふじの花はな

十湖じゅうこ



季語 藤の花 (春)
 場所 中区広沢二丁目
 西来院
 建立 大正 13 年

西来院の藤は紫雲藤せいらいんといつて「熊野の長藤」と並んで評判でした。藤は幹の方から先端に向かつて咲き進みます。句意は藤の花の性質を素直に吟じたものです。明治43年に笠井新田町の高井家、笠井の藤医院の藤の見事さと両家繁栄への祝吟しゆくぎんとして詠まれました。この碑は「出世城」と同様、「浜松俳壇」の人々により十湖の喜寿の記念として選句、建立されました。

松島 十湖（1849 - 1926）遠江を代表する旧派の宗匠。夷白、嵐牛、春湖に師事。俳諧と報徳の融合を図り、教訓的性格の句を特色とする。百人一句塚の主宰者。門人と句碑は全国に分布。